ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

NO. 30

1988・6・30

飛越

白小一

貧乏物語

法學博士　河上肇

一の二

支那政府は

このことなるが支

結局は大局上

自下支那に於て

らず治政派の

際なれば支那政府が

張を容認する迄には尚多少の日子を要

すべし（東京電報）

然らば人世

度必要な熱の分量は

出するかといふに、之に就

の學者の種々なる研究があるが、

に其一例を述ぶれば、監獄囚徒に

一定の勞働をさせ、さうして生

の食物を與へて、生

である。

思ふに吾々人間にとりて大切なもの

は凡そ三ッある。其一は肉體であり、

其二は智能であり、其三は靈魂であ

る。而して人間の理想的生活

ば、要は第三のもの

し發育させて

目次

出藍　傳を悼む　……小嶋康生　(1)
松ヶ鼻渡しを渡った仲間達　……山木　繁　(5)
―思い出にふれて―
『全集』以後篇　……杉原四郎　(7)
中国訳月詠稿四　……一海知義
米浜泰英　(12)
河上肇記念会会報総目次（21～30号）　……　(23)

川勝　傳を悼む

小嶋康生

南海沿線の羽衣にある川勝家の応接室には川勝傳先生（南海電鉄会長）の大きなパネルがある。お気に入りの写真であった。

悲報（四月二十三日、八十六歳で死去）は落雷の激しさで河上肇記念会同人を驚ったが、社葬を前に大門英太郎・記念会世話人、藤木福太郎堺精工会長のお伴をして弔問にあがった。焼香のあと応接室で、喪主の川勝泰司氏に対し、大門世話人から生前、河上会に対する陰ひなたの支援に感謝の言葉が述べられた。一同の目はパネルの川勝先生に向けられていたが、藤木さんが「ほほえみかけておられますネ」と声をかけられると大門さんと川勝氏は「いや、しっかりしろとにらみつけているようでもあります」と別の印象がかえった。

ほほえんでおられるようであり、にらみつけておられるようでもある。大門さんが畏敬し続けた川勝先生は詩に優しく、時に厳しい河上会の陰のリーダーであった。

先生は河上博士との出会いで、人生が決まったと繰り返しいっておられた（『友好一路』毎日新聞社刊、『激動の時代を生きる』東洋経済新報社刊）。もっと正確にいえば『貧乏物語』を手にしたのが大きなきっかけとなった。大正八年、同志社大学専門部に入学した十八歳の時である。この会報の会員通信には『貧乏物語』を読んで世の中に目覚めた、というお便りに接することがあるが、先生も、そうであった。学生運動で退学、立命館大学専門部に再入学したあとで「博士の講義を聞くため、もぐりで京大法経大教室に度たび出かけたものだ」と述懐していた。

大学では河上門下の長谷部文雄、山下英夫の指導を受け、立命館社研のリーダーとして活躍。マルクスの『自由貿易論』を翻訳、出版したという話も伝わっている。京都学連事件では偶然が幸いして逮捕はまぬがれる。京都ライトハウスの田村敬男さん（一昨年、物故。熱心な河上会員）とは、このころの〝同志〟であった。

日本電報通信（電通）入社（昭和三年、二十八歳）後、「川端署のお世話」に一度なっているが、その後、運動から身をひく。この辺のことは、詳しく聞きそびれた。年寄りを抱え、やっとこさ新聞社に入社が決まった直後、警職法改悪闘争で道交法でやられたときの我が身を振り返るだけで埋葬できた。

川勝先生のやり残した分は、戦後、開花していく。ジャーナリスト、紡績連合会理事を経て戦後も旧寺田合名系の経営を担っていき財界の地歩を固める。

財界人川勝は一般的にリベラル派とされている。換言すれば、実生活の中では幅広派であり、融通無碍、この人の好む言葉でいえば「南北東西、道自ら通ず」であった。大企業トップの立場から、いろいろの顔があったと思うが、ご自身は「革新理解派」といっておられた。しかし、持ち前の反骨精神とバイタルな行動力、創造力は「革新」そのものであった。戦後の、その軌跡をみると、河上精神の一つの継承者であった。

なんといっても河上博士の義弟、末川博・元立命館総長の影響力が大きかった。戦後、立命館に末川さんを迎えるため骨折ったのが川勝先生であった。それ以来、折りに触れての末川詣でが続いた。「末川先生にみられている」という気持ちが、この人を終生、前向きにさせた、と私はみている。

川勝先生のキャリアや見識からすれば財界でもっと重きをなしてしかるべきであったが、常に傍流にあった。一言にしていえば日米安保のわく組の外側にいたからである。戦後、ご自身が音頭をとって作った関西経済同友会の代表幹事のポストにつけなかったのも、その同友会史に記されているように「彼は〝左〟であるから」であった。しかし、ひとの囁きを気にする人でなかった。後から振り返っても一本、筋の通った人であった。

河上会では、いま河上精神をいかに活かすか、との問いをしばしば受けている。私は、それぞれが置かれている状況の中で、精一杯、応えることだと思っている。

川勝先生の偉さは、それを実践したことにある。

川勝先生といえば、「日中」だが、国交回復までに果たした功績ははかりしれない。「日中」こと成ったあとは「ロソ」と「日朝」に取り組み、苦労した。財界人で初めて訪朝したのも先生であった。ソ連と関西の間に経済交流のパイプを作ったのも先生であった。他の財界人が後込みするため、仕方なしにという面もあったが、逃げる人ではなかった。そのため右翼暴力団が連日、南海電鉄に押しかけてきたが、決してひるまなかった。

河上会との関連でいえば、河上博士没後四十年を記念した大阪での集いは会場に入りきれないほどの参加者を集めたが、「講師の一人が川勝さんと聞いて出席した」という友人がいた。その君は「八十歳代なかばの人とは思えぬ情熱にただ恐れ入った」と感じいっていた。

塩田庄兵衛先生の主宰する音読会でも講師を引受けられた。ただ、ピョンヤンから帰国のあと体調を崩され、外出はドクターストップとなった。すべての日程はキャ

ンセルとなったが、音読会だけは点滴を受けて出席された。河上会への思い入れが、いかに強かったかである。その河上会メンバーを中心に勉強会の「無葉会」を作られ、こまめに出席されていたのも〝向学心〟もさることながら志をバインタッチする後継者づくりでもあった。

陰の人としての役割もあった。

河上生誕百年祭は結果的に大赤字が残ったが、心よく大口カンパに応じてくれた。大塚有章さんが、もう一つの百年祭をやったが、このときも会場探しなどで骨を折っておられた。川勝先生のポケットマネーが、どれほど、さまざまの運動や活動を下支えしたことか。現に河上会では博士生誕百十年記念事業を計画しているが、「もの入りですが、お願いしますよ」と申し上げ、快諾を得ていただけに、この一事をとってだけでも「損失」も大きい。

しかし、先生の存在は、そんな即物的な損得勘定で量れない。名刺一枚、電話一本が、難しい局面を変えてる力をもっていた。その人脈が大きな陣地を形づくっていた。

戦後、さまざまな運動に生じた混乱が、先生を当惑させ、時には顔をそむけられた。しかし、河上会には、安心しておられた。

パネルの川勝先生は、やはり笑っておられた。しかし、「オレがいなくても、がんばれよ」と叱咤激励する声が響いたようにも思えた。やっていかねばなるまい。

松ケ鼻渡しを渡った仲間達

――児玉 誠の思い出にふれて――

田木 繁

一才から二才にかけ、背髄性小児麻痺にかかり、右足麻痺のため発育おくれ、生長とともにますます歩行困難となった私は昭和五年京大卒業を待って、思いきって大阪北浜の松岡病院で、アキレス腱撃形の手術を受けることにした。約二ケ月入院したが、その間に、京大在学中に雑誌「戦旗」に「拷問を耐える歌」を発表して以来、多少世間に知られていた私のことを聞き知って、戦旗大阪支局の森元宗二、米沢哲の両君がお見舞に来てくれた。私がこれからの作家活動の中心を大阪に置こうと決心したのは、全くこのとき両君から教えられた大阪という町の特殊な魅力のために外ならない。

最初、北区沢上江町の戦旗支局事務所の近くに二階借りをして、作家同盟や演劇同盟の諸君と親しくなったが、やがていわゆる街頭作家の諸君とばかり附合いしている生活がなんとなく物足りなくなった。その上にわれわれの組織は何よりもその基礎を大工場、大経営に移さねばならぬという当時の中央からの指令もかさなった。その私に、どこよりもさきに、安治川右岸川口の（当時われわれは西地区と呼んでいた）春日出工場地帯が思いうかんだ。そこへ対岸の市岡地区の労働者達は主として、源兵衛渡し並びに松ケ鼻渡しによって通ってくる。すると、まず目につくのは、大同電力春日出発電所の八本煙突、同じく川縁に並んだ大阪ガス、汽車会社。それから少しはいって、製鋼、電線、伸銅の住友の三工場。

私は昭和八年二月、その春日出地区の西成線の線路ぞいに大阪ガスの覗けるある二階家へ、同じ作家同盟員の労働者詩人で、後に「詩精神」誌上で、私との競作事件で有名になった大元清二郎によって案内された。

美術家同盟の羽根田一郎夫妻、中西信之夫妻の二家族がやってきて、近所へ住んだのは、それより少し後のこ

とだが、ここで私は昭和九年十一月までとどまり、「詩精神」「関西文学」その他にいくつかの作品を書き、又昭和九年二月には、岳木繁第一詩集「松ケ鼻渡しを渡る」を作家同盟関西地方委員会より刊行するに到った。

発動機船がくるりと百八十度
その軸を廻転させると忽ち
八門のコンクリート製砲身をつきあげた
大同電力春日出発電所を先頭に
ここ安治川右岸に巨姿を浮べた
日本資本主義西部の艦隊が
濁った波を噛んで突き進んでくる
正面に白い巡洋艦は大阪ガス
左手に真黒い戦斗艦は汽車会社
おお幾人のオルグがこの渡しを渡り
幾人のオルグが敵の手に捕われたことか

（以下略）

児玉誠自身はこの春日出地区攻略の仕事の先頭に立ったわけでない。しかし森元宗二の後をうけて、戦旗社大阪支局責任者となった児玉がずっと沢上江町に住みつづけ、戦旗配布の仕事のかたわら、支局機関誌「大阪の旗」を定期刊行し、その紙上で、この私の「松ケ鼻渡しを渡る」並びにその巻末につけた解説「安治川右岸」の紹介までしてくれ、又詩集出版に当っては、同じ作家同盟員、丈月桓志と協力し、校正その他一方ならぬ苦労をしてくれたことは、私にとってまことに感謝に耐えない。いつもネジ鉢巻をし、明けても暮れても、ガリ版きりに熱中しつづけていた彼の姿が、今でも私の脳裏から離れぬ。

（六三・六・二一）

『全集』以後（五）

杉原四郎

はしがき

伊藤正夫が「『武者小路實篤全集』の刊行に寄せて」（『週刊読書人』一九八八年一月二五日号）の中で「思いをこめて取り組んだ全集づくりには、それに伴って新資料が必ず出てくるということも教えられる」と書いているのをよんで、われわれの『河上肇全集』の場合でも、その編集・刊行の過程で数々の新資料が出てきたことを思い出した。従来からその存在は知られていてもその実物の所在がわからなかったもの（例、「信州移住の夢」）や、書かれたことそれ自体が全く知られていなかったもの（例、『資本論入門』の序文の異文）のいくつかを発掘して全集におさめることができたことをうれしく思っているが、同時にわれわれの方不足で当然発掘しえたものを見すごしてしまったのではないかという不安もあって、その思いが今このような連載を私に書かせている。本稿でも全集刊行時には見られなかった河上肇の書簡二通をあらたに紹介することができた。

一

谷口吉彦（一八九一―一九五六）は河上肇門下の一人で、当初はイギリス経済思想史を研究していたが、一九二五年に京大助教授になってからは商業経済学や経済政策を専攻するようになり、その方面の研究のため一九二五―二八年に留学、帰国後学位を得、教授に昇進、一九四六年まで京大にいた。彼自身はマルクス経済学からはなれていったが、そのゼミナールからは島恭彦、松井清、堀江英一、河野健二らマルクス系統の研究者が輩出しているし、河上肇が京大をやめてからも、谷口が個人的に河上と接触することを続けたことは、河上の晩年の日記

に記録されている。その谷口あての河上の書簡が『全集』に一通もっていないのは読者に奇異の感じをいだかせるだろうが、多数の河上書簡が種々の事情で御遺族の手もとに保管されていないとのことで、編者としても残念な気がしたものである。ところが今回谷口ゼミOBの休道会によって、追悼文集が出版されることになり、その編集の過程で御遺族の手もとに散逸をまぬかれた若干の河上書簡があることが判明した。私は河野健二（休道会会長）氏から、追悼文集『大道無門』（非売品、一九八七年一二月）とともに、発見された河上肇の谷口あて書簡三通のコピーをいただいた。御遺族谷口逸彦氏の御諒承をえて、ここにその三通を年代順に紹介することにする。谷口、河野両氏の御厚意に感謝するとともに、解読について御教示をたまわった一海知義氏に謝意を表する。

その一

拝復『改造』への御寄稿は原稿輻輳のため　無理を申したにも不拘　一ト月おくれました。『改造』は直接貴方へ御送り可致の處　御国許へ原稿料と共に送りました。小生の画像はまだお送りいたしませんが、あれは手許に何枚もありますから、御入用の節にはいつでも差上げます。原図は津田氏から私が貰ひうける事になりました。ヘーゲル法律哲学の批判は嘉治君の旧譯あり、それを改譯の上　我等叢書に入れて出す筈になってゐますが、もし貴兄が御訳し下さるならいつでもマルクス叢書に頂戴いたします。林要氏の金融資本論の訳本は既に弘文堂から御送りいたした事と存じます。私は両三日前父病気との電報に接し急に帰省いたし、未だに滞在いたして居る處です。あなたの御手紙を手許に持ってゐないので、まだ申上ぐべき事を忘れてゐるかも知れませんが、不取敢以上だけ申上げておきます。

堀江君から弔詞を頂きました。同君へ右の御礼状を差上ぐべきの處　失礼いたしますゆへお序の折貴兄からよろしく御傳へを願ひます。

先は右まで　餘はまたまた申上げます。　匆々不一

十二月二十三日　　河上　肇

谷口兄侍史

この書簡は内容からみて一九二六年に、留学中の谷口へ送られたものである。封筒はない。嘉治は嘉治隆一、堀江は堀江邑一、弔詞は河上の長男政男の死（一九二六年九月一一日）に対するものであろう。またマルクス叢

書というのは、一九二六年三月に弘文堂から第一冊が出た河上肇編『マルキシズム叢書』をさすと思われる。

その二

つぎの書簡はやはり留学中の谷口へあてたものであるが、はじめの部分がなく、途中からはじまっている。あるいはその部分を谷口は河上の指示通り処分してしまったのかも知れない。

御心ながら貴兄にもおすゝめ致しますが、少なくとも表面上あまりマルクスを出さぬやうにされる事が利益だらうと存じます。なほ助教授を教授に推薦するのは、客観的な材料としての論文――実際においては学位論文のほか無いことになるでせう――を必要とする事に内輪で決定しましたから、お含みおきを願ひます。御留学中にそのお積りで材料の蒐集などにお気をおつけになったら何うかと存じます。――綱川君は助教授に推薦されました。この手紙は御一覧の上火に附して下さい。

一九二七年二月五日　肇

谷口兄

この前の手紙で仰越しの私の肖像の絵葉書は若干枚手許に保存して居りますから　御帰朝の上拝呈いたします。原画は津田君から貰って私の所有物になりました。

この手紙の封筒の消印は昭和二年二月五日、宛名はつぎの通りである。

Herrn Prof. K. Taniguchi
bei Herrn Israel,
Johann-Sigismund Str., 3,
Berlin-Halensee, Deutschland

その三

貴電忝く拝受いたしました。なほ私が検挙されました際にも、次女が結婚いたしました際にも、更に今回の出獄に際しましても、毎回鄭重なる御贈物を頂き御厚情の段感謝の至に存じます。乍略儀茲に書中を以て積もる御礼申上げます。　匆々不一

七月二日　河上　肇

谷口学兄　侍史

これは一九三七年の書簡である。六月十五日に出獄した河上は、七月四日の日記に「諸方の挨拶状、今日にて出し了る」と書いているが、この書簡もその一つである。封筒の消印は昭和一二年七月四日、宛名は「京都市上京

区上加茂前荻町一九ノ一　谷口吉彦様侍史」、差出人は「東京都杉並区天沼一丁目二二九　河上肇」である。

二

昨年の十一月二日から十二月五日まで、関西大学総合図書館一階展示室で、「河上肇と関西大学」と題する資料展示が行われた。展観目録のさばけ方から推して、期間中の来観者は千名にのぼったと推定される。十一月十四日に経済学史学会の大会が関大であり、約三百名の会員が集まったので、その中にこの展示会を見た者も多かったと思われるが、来観者の大半は関大の学生で、若き日の河上肇が関大で経済学を講じていたことを展示されている当時の記録ではじめて知り、河上への親近感をもったものもあるという。

展示品は約六〇点で、㋑全集三十六冊をはじめ主要著作、主要訳書、『日本経済新誌』と『社会問題研究』、天野敬太郎『河上肇文献志』（天野は元関大図書課長）、㋺関西大学関連資料として、『関西大学学友会の『関西学報』にのった河上肇の英文経済学や経済原論の試験問題、当時の河上の半身像写真や教室での講義の写真（黒板にMarxやFisherの名や彼らの著書名が書かれている）、それから本誌第25号・第27号でも紹介した河上肇と学生との往復書簡や関大の教務責任者あての河上の書簡など、㋩参考出品として一海知義氏と私の所蔵する河上の軸物・色紙・短冊などから成る。

一海氏の出品されたものはつぎの三つの河上肇の書である。㋑軸物「和歌」（昭和七年）、㋺短冊（昭和九―一二年頃）、㋩軸物「二反余技」（昭和一七年）。㋩は一海「私の秘蔵品　―河上肇の書―」（杉原・一海『河上肇　芸術と人生』、新評論、一九八二年に収録）に書かれているように、河上肇の親友河田嗣郎が描いた紅い牡丹のような花の絵の横に河上が自作の五言絶句の詩「残春」を書いたもの、㋺は河上が獄中で書いた蘇東坡の七言絶句の詩、河上は獄中でとくに蘇東坡の作品に親しんだ。㋑は有名な「たどりつき」の短歌を万葉仮名で書いたものである。

また私の出品したものは、㋑獄中の河上が林正三の水彩画に自作の詩を書き添えたもの（これについては「『全集』以後㋺」本誌第26号で述べた）と、㋺門下生柴田敬あての河上の名刺と書簡とをおさめた扁額とである。名刺は出獄の挨拶として昭和十二年七月四日に柴田敬の京都の留守宅（当時柴田は留学中）に送ったもの、書簡

は還暦祝に対する礼状で昭和十四年十一月吉日とある（全集第26巻に収録）。これを私は恩師柴田先生の形見として御遺族からいただいた。

三

河上肇をえがいた画や、彼が登場する小説はこれまでいくつかあったし、短歌でも斉藤茂吉や大塚金之助の作品には彼をよんだものがあった。しかし俳句で彼をよんだものはなかったのではなかろうか。最近友人から贈られた句集の中にそれを見つけたので、珍しいものだから最後にそれを紹介しておくことにしよう。

『山本歩禅集』（自註現代俳句シリーズ・V期　56、社団法人俳人協会、一九八七年一二月）の一二一ページにつぎの句がある。

河上肇墓前の菊は誰が活けし

一九七七年の作で、自註にいわく、

「日本におけるマルクス主義経済学の先駆者で、京大教授であった。戦後自叙伝を読んでその純粋さに打たれた。京都法然院に墓と歌碑がある」。

山本歩禅君は三高時代の友人で、同じ頃に作句をはじめた。私は結局ものになしえずに了ったが、彼はずっと精進をつづけ、『森の鹿』（かつらぎ双書、一九八四年）という立派な句集も上梓している。上掲の句はこの中にもおさめられている。

法然院の墓前にある名刺受に入っている名刺は今も記念会の事務局で整理され、記念会からお礼状を出すようにしている。私が見た芳名者リストには、北海道や四国、九州からの人にまじって外人の名も見える。その中に私は宇野収の名を発見した。関西経済連合会会長の宇野君もまた、山本君や私らとともに、一九三九年に三高の文乙を卒業した二十数名の一人である。

一九八八年度総会日程

一〇月一六日（日）午前一一時～三時

恒例の秋の総会日程を決めました。講師は交渉中です。是非ご参集下さい。

世話人一同

中国訳日録稿（四）

一海知義
米浜泰英

本訳書は上野書店版を底本としている。

「訳序」の和訳をつぎに掲げる。

「著者に関しては、ここで多くの紹介をする必要はあるまい。わが国で少しでも現代社会科学を学んだ人なら大概はすでに河上博士の深い洞察、透徹した議論、警抜な文章と豊富な著述内容に通じているであろう。

この書は、著者自身が説くところによれば、「二十年の長き期間に亘って占めえたる・大学の研究室の・椅子に坐して書きえた最後のもの」である。このなかで彼は現実社会の種々の矛盾をはっきりと分析するとともに、現実社会の必然的進路を明確に指し示した。「現在われわれは人類社会の前史の最後の一頁を編ん

10 マルクス主義経済学

一九二八（昭和三）年八月一五日、上野書店発行。四六判、序四頁、目次三頁、本文二二八頁。本書は「マルクス主義講座」第六巻（一九二八年五月二〇日刊）に掲載された同題の論文を、新たに独立の冊子としたもの。のち改造文庫として刊行（一九三〇年五月一五日）、その際、附録として『経済学大綱』の一部と「階級斗争の必然性とその必然的転化」を再録した。

⑯ 馬克思主義経済学

温盛光訳　一九二八年一一月初版　上海・啓智書局発行　「社会科学叢書」第二編　目次三頁　「社会科学叢書発刊旨趣」一頁　訳序二頁、本文一三二頁　定価大洋四角半

であり、人類社会の本史の第一頁の前夜を描写しているのである。」混沌とした中国社会に本書を紹介するのは、あながち無意味ではあるまい。

訳者は注意深く翻訳したつもりだが、如何せん学殖浅く、多くの誤まりを犯していることと思う。読者諸氏、どうか措辞によって気を悪くされぬようお願いしたい。天下の明達の士が御示教を吝まれないならば、これに過ぐる幸いはない。

一九二八年十月二十七日　訳者」

本書の初版を北京図書館が所蔵する。

⑯ 社会主義経済学

鄧毅訳　上海・光華書局発行　一九二九年七月初版

訳者弁言一頁　目次三頁　本文一五八頁　一九三〇年八月再版　定価大洋四角五分

本書は、上野書店版を底本としている。

「訳者弁言」の和訳をつぎに掲げる。

「社会主義経済学は現代社会のすべての人が理解しておかねばならないものである。ただ、各種の著作や翻訳は、ひどく難解繁雑であるか、さもなければ簡略にすぎる、といった嫌いがある。本書にはこの二つの欠点が全くない。まさに一般読者に便利な書といえる。

本書の原著は、本年八月に出版された著者の最近の著作である。著者は総選挙に失敗した経験をふまえて、事実の真相を早急に一般民衆の前に暴露する必要があると感じた。そこで、一層ごく平易な文章を用いて、極めて深遠な道理を説こうとしたのである。

本書は五章十七節に分けられ、全文六万字に満たないものであるが、社会主義経済学の全ての面に説き及んでいる。本書を読了すれば、経済学の基礎知識はマスターできたと言えるであろう。

（民国）十七年十二月十一日　訳者鄧毅」

本書の再版を復旦大学図書館が所蔵する。

⑰ 馬克思主義経済学

李季訳　一九三二年四月五日初版　上海人民出版社刊行　原序二頁　目次四頁　本文一六九頁　訳者跋二頁　定価五角　初版の部数二〇〇〇部

本訳書は、改造文庫版を底本としている。訳者跋の和訳をつぎに掲げる。

「この『マルクス主義経済学』は、河上博士の多くの経済学の著作のなかでも、最も簡明で最も平易な入門書である。本書は、著者が総選挙に失敗した経験（昭和三年六月）をふまえて、事実の真相を早急に一般大衆の前に明らかにしておく必要を感じて執筆した大衆向け啓蒙書である。啓蒙書ではあるが、資本主義社会の実体を暴露し、無産者大衆の進路を指し示すという点においては、他の著作と比較してより明快であり、より強力である。かくて、われわれは本書を「資本論解説」とみなすだけではなく、同時にまた「無産者政治必携」とみなすこともできる。――それこそが、本書を訳そうと筆を執った私の動機である。

本書の第二章「商品の構成分子としての使用価値および価値」は、陳豹隠氏訳の博士の著書『経済学大綱』の第一篇第一章第一節（本書の日本語版では附録として巻末に置かれている）を挿入した。一つの理由は、時間が節約できて早く刊行できること、もう一つの理由は、陳氏の訳に何らの誤まりがないこと、である。そこでこれを借用させていただき、改めて訳しなおすことはしなかった。この場を借りてお断わりしておく。

一九三二年四月　　上海にて　　李季　一

初版を北京大学図書館が所蔵する。

11　経済学大綱

一九二八（昭和三）年一〇月二三日、改造社発行。四六判、著者肖像一枚、序、例言、目次、本文、河上肇年譜、著述目録、以上通し頁九〇二頁。上篇・下篇に分れ、下篇「資本家的経済学の発展」は『資本主義経済学の史的発展』（一九二三年刊）に加筆したものである。

なお、著者の死後、三種類の『経済学大綱』が翻刻された。

イ改造社刊、二分冊、一九四六、四七年。ロ青木書店刊、四分冊、一九四九年。ハ三笠書房刊、三分冊、一九五二年。

⑩　経済学大綱

陳豹隠訳　一九二九年四月一〇日初版　上海・楽群書店発行　著者肖像　序一〇頁　目次六頁　本文・訳者跋五一四頁　一九二九年五月一五日再版　初版三〇〇〇部、再版五〇〇〇部発行　定価上製二元五角　並制二元　「訳者跋」に記されているように、本訳書では「下篇」は省略されている。

「訳者跋」の和訳をつぎに掲げる。

「本書の著者は日本で最も会名の高い、真に学問のある学者である。本書はまた、著者の大学講座での二十年の結晶であるから、大学の経済原理の科学書でもあって、まことに世上第一の良書と言ってよい。日本語で書かれたもので、本書に比肩するようなものがないだけではなく、恐らく英・仏・独・露各国語で書かれた書物の中でも本書を越えるものはないであろう。これは訳者が自ら体験したことを語っているのであり、出まかせの出鱈目を言っているのではない。なぜなら、訳者は経済学の専門研究者として、これら五カ国の言語で書かれた経済学書を研究してきただけではなく、同時に大学で多年教鞭をとってきて、この分野の内情に精通しているからである。いまもし、本書を大学レベルの経済原理の教科書として、その特色を述べるとすれば、少なくとも以下のような点を列挙できる。

第一。本書は純粋に科学的性格の書であり、ごまかしもなければ、手ぬかりもない。まきしく科学上のいわゆる〝必要にして且つ充分なる条件〟を満たしている。普通の大学の経済原理の教科書には、往々にして適当にうわべをごまかしたものが多い。いわゆる生産条件論、消費論、欲望論等〝といった類は、完全にうわべだけごまかしたものである。（これらのものは単に経済現象上の常識に過ぎないのだから、大雑把な経済概論で述べればいいのであって、経済現象の解剖を主要テーマとする本書のような経済原理論の中で論ずべきではない。）ところが、一方ではひたすら警言を尽して粉飾するかとおもえば、他方では逆に重要なしくみを完全に無視する。例えば、利潤・利息・賃金といった各種分配物の相互連関、生産と流通の内的関係等に対しては、例により全く言及しない。だからいたるところ穴だらけで、〝一皿のばらばらの砂〟式の知識で成立っているにすぎない。ところが本書には、こうした欠点がない。

第二。本書は純粋に科学的研究法と科学的叙述法にもとずいている。本書の章節の大体の排列をみただけで、それは明らかである。商品から貨幣へ、貨幣から資本へ、資本の成立から資本の蓄積へ、更に進んで資本の集中に到る、真に語り尽くしたというべきで、その研究方法は筍の皮を剥ぐが如く、剥いでいくほど核心に到るとともに、その叙述方法はまた画家が肖像を

描くように、一筆一筆加えていって、ついに誰もが理解できる一人の人物を描き上げるが如きものである。これ以外にも、本書にはこのような例がまだいくらでもある。だから、本書は単に経済原理の教科書であるのみでなく、同時にまたすぐれた社会科学の研究方法論でもある。こうしたことは無論普通の経済原理の教科書には絶対にないことだ。

第三。本書は動の観点を重視している。普通の経済原理の教科書では、ただ静止した面から、諸現象を排列しているだけで、動の面から各種の現状の変化を観察しようとしないために、往々にして真理を埋没させてしまう。例を挙げていえば、資本というものは、本来つねにその姿態を変化させるものである。すなわちそれは時には貨幣に変化し、時には生産手段と原料に変化し、時には新商品に変化する。しかもその機能から言えば、資本は時には潜在資本に変化しうるし、産業資本に変化したり、商業資本、銀行資本、更には金融資本といった種々のものに変化しうる。だから、もし変化の観点から資本を見なかったならば、永久に資本の真の意味は理解できない。一般の経済原理ではこうした点をないがしろにしているから、書物を読んでも多くの経済上の真相を見逃してしまうことになる。ところが本書には、こうした欠点がない。

第四。本書が引用する実例は、すべて東洋人の心理に近いものである。普通の経済原理で引用される材料は、いつも西洋の材料であるから、読者に隔靴感を起こさせやすい。本書の実例はそうではなく、大て い東洋の実例であるから、東洋の読者には極めて容易に理解できる。

本書をもし大学の経済原理の教科書とするならば、これでいいのだが、通俗の入門書とするとなると内容がいささか高度で深すぎるきらいがある。だから、本書を読む人は、まず大雑把な経済常識を身につけ、生産とは何か、流通とは何か、といった類のことを知っていなければならない。もしまだこの種の常識が欠けているならば、拙著『経済現象の体系』を買ってお読み頂くのが一番よい。私のこの小冊子は多分『経済学大綱』と同時に出版される筈である。（私の小冊子は二三年前、私が国立某学校で講義した経済学概要の一部分である。私のその講義録は上下二篇に分け、上篇は「経済現象の体系」、下篇は「経済現象の解剖」とした。下篇には三つの部分が含まれる。（一）商品価値の

形成、(二)剰余価値の分配、(三)資本経済の将来。この下篇は、河上博士の『経済大綱』がある今日、無論すぐに出版する必要はなくなった。上篇に関しては、本来、(一)序説、(二)資本経済の意義、(三)経済現象の基礎、(四)企業の形成、(五)生産部門の区別、(六)資本経済下の市場、(七)生産と消費の関係、(八)分配現象及び社会問題、(九)国際経済と帝国主義、等九つの部分に分けた。そこで述べたことは、ことごとく現象に関する大雑把な説明だけであって、現象の解剖には全く説き及んでいない。だから、『経済学大綱』と重複しないどころか、本書のための準備の書といってもいい程である。従って、『経済学大綱』の出版以後、出版の必要がないどころか、大至急出版する必要があるのである。〕

経済学を研究する人は、同時に現在の経済状況に留意することによって、はじめて事実と学理を互いに照応させ、理論と実際とに通徹した実力を養うことができるのである。だから、私は読者が傅子東氏訳の『大戦以来の欧洲経済概況』も併せて読み、視野を広められるよう切に希望する。

『経済学大綱』を読みおえて、更に深く研究しようとする人は、当然経済史と経済思想史を研究しなければならない。経済史に関する最も役立つ書は、日本の改造社から最近出版された『経済新史』にまさるものはない。この書は三つの部分に分れている。第一の部分は「資本主義以前の経済史」、第二の部分は「資本主義の成立及びその後の経済の発展」、第三の部分は「社会主義経済の発展」。この書は山川均、石浜知行、河野密、等数人の有名な学者の共著である。訳者はそれを年内に中国語に訳そうと思っている。経済学史に関しては、現在とてもいいといえるものはない。Gide and Rist, Haney、Spann 等の書は、雑貨店にすぎないこと、もとより言うまでもない。『剰余価値学説史』もまた近代まで包括していない上に、繁雑難解を極めている。河上博士の「資本家的経済学の発展」もまた、前には重農派がなく、後には歴史学派および心理学派がないので、むろん完全とはいえない。ここまで書いてきて、私は読者におことわりしておかなければならない。前出の河上博士の原序に付した注の中で、私が言った重大な声明とは、このことを指すのである。(注) 一つは、この「資本家的経済学の発展」は完全ではない。二つは、この『資本家的経済学の発展』が元になっ

ており、この旧著はすでに二、三年前に、上海大学の一グループによって中国語に翻訳刊行されており、今日重複させる必要はない。三つは、経済原理と経済学史は、本来その性質とレベルを異にする別箇のものであり、両方をごっちゃにするのはかえって読者に不便である。従って私の訳したこの『経済学大綱』では、断然経済学史を割愛した。私は次のように考えている。もし読書界がやや完全な経済学史を必要と考えるならば、私は、㈠『剰余価値学説史』の重農学派に関する部分、㈡河上博士の「資本家的経済学の発展」、㈢ブハーリン Buharin の『金利生活者の経済学』を合わせ訳して一冊の『経済学新史』とする。そして、その書物の内容は大雑把にいうとこうなる。㈠「重農学派の経済思想」、内訳は、(1) William Petty, (2) Ch,d' Avenant, (3) Dudley North and John Locke, (4) David Hume and Massie (5) James Steuart, (6) 重農学派の一般的性格、(7) Turgot, (8) F・Paoletti and Pietro Verri, (9) 重農学派のスミスに対する見解、(10) Schmalz and Graf de Buat, (11) 英国のある重農学者、(12) Necker (13) Linguet, (14) Quesnay の経済表。㈡「資本家的経済学の発展」の内訳。(1) 序説、(2) Adam Smith の先駆者、(3) Adam Smith, (4) Malthus 及び Ricardo 、(5) Bentham 及び James Mill 、(6) John Stuart Mill。㈢『金利生活者の経済学』の内訳。(1) Marx 以後の国民経済学、(2) 限界効用説、(3) 価値論、(4) 利潤論、(5) 結論。こんな風にすれば、比較的良好な経済学史が得られよう。

言うまでもないことだが、経済学の研究は、哲学および社会学と関係している。だから『経済学大綱』を読む人はまた哲学と社会学に関する主だった書物をも渉猟してみる必要がある。そうして始めて心から納得できるのである。この目的を達するために、どうか拙訳『科学的宇宙観』及び拙著『科学的社会観』を参照して頂きたい。前者は恐らく『経済学大綱』の前に出版されるであろう。

本書の翻訳には細心の注意を払ったので、一点の誤りもないものと信ずる。（原書に誤植が十数ヵ所あったが、すべて私が改めた。）翻訳は達意を重視するとともに、原著者の口吻を伝えることを重視した。従って全文が一種の講義口調になっておるが、これはもとより一面では余りに淳々とかみくだき過ぎている、と

いう印象を免れない。しかし、別の面からみれば、またそれが故にかえって理解しやすい、といえるかもしれない。私が加えた註釈は、すべて別のカッコを用いた。これらの註釈は、一般の人がきっと困難を感ずるであろうと思われる箇所に付した。あるいは、これ以外にも註釈をしなければならない箇所があるかもしれないが、それは第二版の時にまた付すことにしたい。（本書は少なくとも十年の寿命はあるであろう。）

原書の末尾には、さらに河上博士の年譜と著作年表が付されているが、翻訳の必要がないと思い割愛した。」

（注）冒頭の河上肇の序の末尾に訳者の次のような注が付されている。

「この原序に関して、訳者は極めて重要な意見をもっている。ただ小註で述べるにはあまりに長すぎるので、訳者執筆の跋文にまわした。読者は、それが一体どういう意見であるのか急いで知りたいと思われるならば、この序を読み了えた後、ひき続いて巻末の跋文をご覧いただきたい。――編」

本書の再版を北京図書館、北京大学図書館が所蔵する。

⑲ 経済学大綱

訳者名記載なし　一九四九年九月初版　（北京）生活・読書・新知三聯書店発行　原序六頁、目次五頁、本文五四八頁　一九五〇年二月第二版　初版五、〇〇〇部　再版一〇、〇〇〇部　定価 ₩ 18.50.

本訳書も「下篇　資本家的経済学の発展」は省略されている。

本書の第二版を北京大学図書館、中国科学院図書館が所蔵する。

⑳ 資本主義経済論（河上肇著『経済学大綱』、列寧著『帝国主義論』）

訳者名記載なし。一九五〇年五月初版　北京・華衆書店発行　「本書に関する二、三の説明一三頁。それ以外の目次、本文等頁数不明。定価四六元。

「本書に関する二、三の説明」の和訳をつぎに掲げる。

「『経済学大綱』は、日本の著名なマルクス主義経済学者河上肇の著作である。河上肇は、弁証法的唯物論、

唯物弁証法、史的唯物論に通暁し、かつマルクス政治経済学の代表的著作『資本論』について長い年月にわたって研究した。だから、彼のこの著作は、科学の基礎的な理論と方法を具えた経済科学の書である。

『経済学大綱』の主な内容は、マルクスの『資本論』と大体一致している。河上肇は『資本論』を研究した結果、『資本論』が政治経済学の最もすぐれた著作であり、その体系は科学的に厳密であるという結論に達したことによって、自分もまた『資本論』の体系にならって、概要を叙述する形でこの書物を著わした。『資本論』はマルクスが数十年の歳月をかけて研究した成果であり、浩瀚な三巻の書は、中国語に換算してほぼ二百万字にも達する。内容は、経済学・哲学・歴史・自然科学等各方面の知識を包括している。単に分量が多いだけではなく、内容もまたかなり難解であり、内外の一般読者ははじめて『資本論』を読むと、皆一様に困難を覚える。そこで、初学者の求めに応じて、『資本論』の概略をのべ解説を施した書物がいくつか生まれた。しかし、これらの著作は、エンゲルスの『資本論提綱』が『資本論』の最もよい概要となっているのを除いては、いずれも欠点と誤まりがある。こうしたなかにあって、『経済学大綱』は比較的よい著作であり、『資本論』の体系をほぼ保ちながら、なおかつ内容も大体正確であり、(註)『資本論』の入門書とすることができる。

『経済学大綱』の主な研究対象は資本主義社会の経済であり、資本主義の生産過程、流通過程、資本の総過程を分析し、資本主義経済の運動法則、つまりいかにして資本主義が発生・成立・発展から消滅に至り、高度な経済にとってかわられるか、を明らかにする。ただ、マルクスは資本主義経済の発展期の人であるから、彼は主に資本主義経済が発展した時期の状況を観察・分析できたが、資本主義発展の高度な段階 ——帝国主義時代経済の ——に対しては、わずかにその見取図を示しえただけで、詳細な分析は不可能であった。レーニンの『帝国主義論』はマルクスの観点と方法を用いて、資本主義の最高段階の経済を分析したものである。こうしてみれば、『帝国主義論』は『資本論』の継承・発展であり、またマルクス主義政治経済学をさらに発展させたものである。帝国主義は資本主義の基本法則が発展していった必然的結果であるとともに、資本主義の基礎の上に、それぞれの特色と資本主義発

展段階の異なった法則を作り上げている。

われわれは『資本論』の中にのみ、同様に『経済学大綱』の中にのみ資本主義の必然的消滅を看取できる。しかし、資本主義はいかにして消滅し、いかにして必然的に共産主義にとってかわられるのか？　『帝国主義論』においてわれわれはさらに深い、具体的な理解に到達できるのである。

レーニンは帝国主義を長年研究し、豊富な資料を集めて、帝国主義研究のノートを四十冊もつくった。その中には一四八の書籍と一三二の論文の摘録、大量の材料、計画、多くの注釈、書物の抜萃、調査資料等が含まれている。（リヤザノフ『帝国主義論研究提綱』を見よ）。決して、一、二冊のブルジョワ経済学者の著作に依拠して書いたものではないのである。

『経済学大綱』と『帝国主義論』（この両書を合わせてわれわれは『資本主義経済論』と呼ぼう）をもってすれば、資本主義に対してかなり深く全面的な理解に到達しうると言えよう。この書物は、われわれの新民主主義経済――今日なお帝国主義の存在する時代における――、および新民主主義経済の中での資本主義経済を理解するうえで、有益である。また、資本主義と帝国主義に関する誤った観点を知るうえで、益するところがあろう。われわれは学習の過程で両書の観点と方法を把握することができるならば、そのほかの経済を理解することにもまた役立つであろう。

精神的生産もまた物質的生産と同様に、労働の代価を支払って得られるものである。よく頭を使い、よくおしゃべりをし、よく討論をしてこそ、学習の果実を得ることができるのである。

一九五〇・三・一〇。

（註）『経済学大綱』の「金融資本」の章は、ヒルファーディングの『金融資本論』とその他のいくつかの著作に依拠して書かれており、この章は読むに及ばない（従って削除した）。最も読むべき古典的著作は『帝国主義論』である。『経済学大綱』原著にはいくつかの誤まった観点がみられる。例えば「資本主義の自殺」（二カ所ある）とか、前の方で「紙幣は価値をもたない」といい、後の方では逆に「紙幣は値下がりする」といった例。こうした部分は校閲者がすべて改めた。「地租」の章の中で、土地収益逓減の法則に触れているが、これはブルジョワ経済学の観点であり、これもまた誤りである。

本書の初版を中央編訳局が所蔵する。

㉑ **経済学大綱** 上巻

仲民訳 一九六五年一一月初版（北京）生活・読書・新知三聯書店発行 「本書の読者のために」（宮川実）二頁 目次四頁 本文三三〇頁 定価一・一〇元

奥付の頁に次のように記されている。「本書は青木書店一九四九年版第一・二分冊によって訳したが、同時に改造社一九二八年版「経済学全集」第一巻と筑摩書房一九六五年版「河上肇著作集」第三巻を参照した。本書の訳稿は沈佩林、朱紹文同志に見ていただいた。」

冒頭の「本書の読者のために」（宮川実）は、青木書店版にあるものをそのまま翻訳したものである。

本訳書には原書の上篇にあたる部分がすべて含まれている。本書の下巻には「下篇 資本家的経済学の発展」が予定されたのであろうが、今日まで刊行されていないようである。

本書の初版を中央編訳局、北京大学図書館、中国科学院図書館が所蔵する。

編集後記

「とだま印刷」に本号の最初の原稿をわたした際、お父さん、児玉誠氏が五月二八日に亡くなられたことを知らされました。児玉さんは、本誌先号で提案を寄稿されたのが本会では最後になりました。この提案にあるように、常に本会の運営に〝きくばり〟をして下さり、さらに『煙』の広告掲載などによって本誌刊行の陰の下支えをして下さっていました。心より哀悼の意を表します。

急遽、大門さんを通じて、田木さんに児玉さんの思い出を書いてもらいました。本会を支えて下さっていた大きな人、川勝さんを喪い、近日訃報に接すること多し。

「河上肇と私」（山田、山本、佐藤各氏）の原稿、さらに石井さん、小西先生のご寄稿をいただいております。深謝。次号乞期待。

本年度総会は一〇月一六日（日）と日程が決まりました。京都同体と重なりますが、多数の会員の出席を願います。

（H生）

河上肇記念会会報総目次（第21～30号）

No.21（一九八五年九月一日）

一九八五年度総会御案内

河上肇の「貧乏物語」と私（小谷正守）

「貧乏物語音読会」岩国紀行（沖本　彰）

岩国の河上肇旧宅をたずねて（承前）（脇　英夫）

『貧乏物語』に関する二、三の感想（米浜泰英）

会員通信、資料『上出敏詩抄』（細川元雄）アンケート集計報告（大久保雅撮）、編集後記

No.22（一九八六年一月三〇日）

河上肇没後四十年特集

河上肇の四十年（杉原四郎）

河上肇と王守礼（海知義）

河上肇と佐々木惣一（松尾尊兊）

河上肇記念会山口懇話会設立について（紹迫朝夫）

編集後記

No.23（一九八六年四月一五日）

河上肇没後四十年・全集完結記念講演会ご案内

昭和六〇年度総会特集／自己紹介より／

河上肇における「陽明学」と「タオ自然学」（佐藤克己）

ひとこと釈明させて下さい（二村一夫）

ひとことおわびいたします（松尾尊兊）

会員通信、総会雑記

No.24（一九八六年九月一日）

一九八六年度総会御案内

特集　河上肇没後四十周年・全集完結記念のつどい

集会記（紀平能雄）

所感（寿岳文章）

記念集会に（塩田庄兵衛）

河上肇と天皇制（講演）（岩井忠熊）

全集にみる河上肇の人間像（講演）（杉原四郎）

河上肇と大阪～大阪会場開会の辞より～（杉原四郎）
人間河上の再考を（川勝　傳）
河上肇と中国文学（講演）（一海知義）

No.25　（一九八七年二月一〇日）
年頭所感（杉原四郎）
『全集』以後(1)（杉原四郎）
河上肇資料整理余話（米浜泰英）
安井功さんを偲ぶ会（塩田庄兵衛）
一九八六年総会記（紀平龍雄）
生誕一一〇年記念事業アンケート、新刊紹介、一九八六年収支報告、編集後記

No.26　（一九八七年六月一五日）
『全集』以後(2)（杉原四郎）
中国訳目録稿(1)（一海知義、米浜泰英）
一九八六年度総会特集～出席者のスピーチより～
「宗教的真理」と「科学的真理」の統一的理解について（佐藤克己）
会員通信

No.27　（一九八七年九月一五日）
一九八七年度総会御案内
真実を求めた柔軟な心～河上さんの人柄とその著作から～（上田　隆）
『全集』以後(3)（杉原四郎）
中国訳目録稿(2)（一海知義、米浜泰英）
会員通信、編集後記

No.28　（一九八七年一二月二〇日）
特集　河上肇と私　I
（前川文夫、曽我まり、上野　晃）
『全集』以後(4)（杉原四郎）
中国訳目録稿(3)（一海知義、米浜泰英）
記念会会報を読み返して（紀平龍雄）
『今日の問題』の問題（SK生）、会員通信、編集後記

No.29　（一九八八年四月一日）
住谷悦治先生をしのんで（杉原四郎）
大山郁夫宛　河上肇書簡
六二年度総会特集

河上肇と新労農党（講演）（細迫朝夫）
総会スピーチより
河上肇先生と私（旭　秀彦）
河上肇と私（中谷武雄）
会員通信、編集後記

No.30　（一九八八年六月三〇日）
川勝傳を悼む（小嶋康生）
松ケ鼻渡しを渡った仲間達
――児玉誠の思い出にふれて（田本　繁）
『全集』以後151（杉原四郎）
中国訳日録稿141（一海知義、米浜泰英）
編集後記
河上肇記念会会報総目次（21～30号）

人名索引

（執筆者名、被追悼者名の五十音順とし、掲載号数を指示した。なおイニシアル、無署名のもの、総会スピーチ、会員通信欄等は除いた）

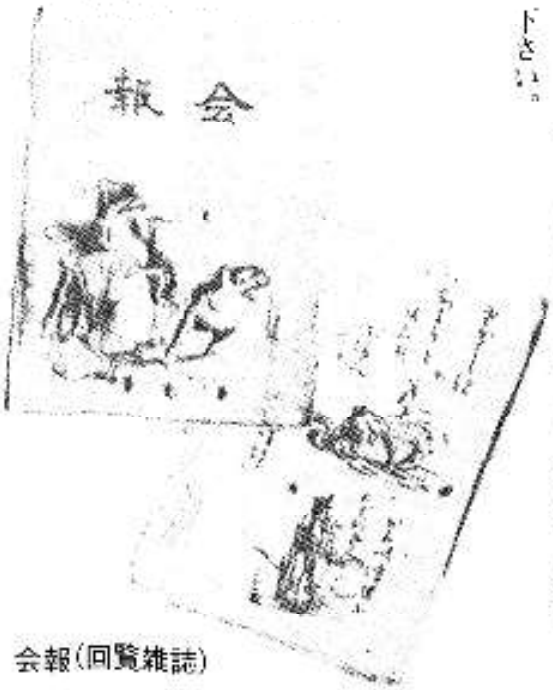
ア
旭　秀彦　29
イ
一海知義　22 24 26 27 28 30
ウ
上野　晃　28
カ
川勝　傳　24 30（追悼）
キ
紀平龍雄　24 25 28
コ
小嶋康生　30
小谷正守　21
サ
佐藤克己　23 26

シ
塩田庄兵衛 24 25
寿岳文章 24
ス
杉原四郎 22 24 25 26 27 28 29 30
住谷悦治 29（追悼）
ソ
曽我まり 28
タ
田木繁 30
ナ
中谷武雄 29
ニ
二村一夫 23
ホ
細川元雄 21
細迫朝夫 22 29
マ
前川文夫 28
松尾尊兊 22 23
ヨ
米浜泰英 21 25 26 27 28 30
ワ
脇英夫 21

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(回覧雑誌)

河上肇記念会
会　　則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市(または京都市)に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。

会費は年額二〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は事務局へご報下さい。

〒五四二　大阪市南区島ノ内一―二〇―一九
（丸善石油ビル）　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒 542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九八
振替口座　大阪　三二三一九五

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年 創刊　只今51号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（75～85才）が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に「煙」を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A5版 120頁 頒価 500円 〒200円

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24
児玉　誠方
電話 京都（075）811－7646番
振替 京都　2　15653番